

日本赤十字九州国際看護大学/Japanese Red Cross Kyushu International College of Nursing

日々の感覚と対話からのネットジャーナル創刊は可能か？

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2018-12-13 キーワード (Ja): キーワード (En): dialogue, narrative, daily senses, homeless people, health consultation, publishing narrative journal 作成者: 守山, 正樹 メールアドレス: 所属:
URL	https://jrckicn.repo.nii.ac.jp/records/562

タイトル

日々の感覚と対話からのネットジャーナル創刊は可能か？

アイテムタイプ	一般雑誌記事／Essay
言語	日本語
キーワード	対話、ナラティブ、感覚、ホームレス者、健康相談、対話の論文化
別言語の キーワード	dialogue, narrative, daily senses, homeless people, health consultation, publishing narrative journal
別言語のタイトル	From Daily senses and Dialogues into Net Journal
著者	守山正樹
著者別名	MORIYAMA Masaki
雑誌名	感性と対話 (Senses & narratives)
巻	1
号	1
ページ	3 - 12
発行年	2018
出版社	ウェルビーイング附属研究所
ISSN	オンラインジャーナル 2433-3549
書誌 ID	国立国会図書館書誌 ID 028356572
権利	©ウェルビーイング附属研究所 本文データは出版者の許諾に基づき複製したものである。
関連サイト	https://narrativesenses.wordpress.com/
フォーマット	pdf
著者版フラグ	
大見出し	



Working Paper Plus

エッセイ A

日々の感覚と対話からのネットジャーナル創刊は可能か？

守山 正樹¹

抄録： 日常生活における対話を文字化し、レポートを書くことの意味は何だろうか（論点1）。どうしたら体験したばかりの新鮮な感覚や発せられたばかりの新たな対話からレポートを書けるだろうか（論点2）。そうしたレポートを集めてジャーナルを作ることは可能だろうか（論点3）。以上の論点を、対話を通して深めていったら、どのような展開になるだろうか。NPO 法人ウェルビーイングが現在（2018年5月時点）創刊しようとしているネットジャーナル（感性と対話）の可能性を、その4年前（2014年）に論じたのが本稿である。

【感性と対話 1(1) 3-12, 2018】

Key words : 対話、ナラティブ、感覚、ホームレス者、健康相談、対話の論文化

* 1 日本赤十字九州国際看護大学、NPO 法人ウェルビーイング附属研究所

連絡先： E-mail : masakimoriyama[@]gmail.com

1. ネットジャーナルを作りませんか

M「新たなネットジャーナル作りませんか」

I「NPO 法人ウェルビーイングではニュースやメルマガを会員に送りますが後に残りません。ネットジャーナルは違いますか」

M「ネットジャーナルは逐次刊行物です。何巻何号の情報をつけネット上で公開・保存します」

I「昔の記事が見つからずに困ることも多いので、保存できるなら便利ですね。」

2. 数量的なエビデンスとは異なるジャーナルの可能性

I「新ジャーナルの内容は、メルマガやニュースの原稿を載せればいいのですか」

M「メルマガやニュースは既に立派な形になっており、転載は意味がありますが、ジャーナルというからには、面白く役に立つ報告やレポートがあるといいですね」

I「面白いとやる気になります。でも一体どんな報告？ レポート??」

M「既存の学術雑誌は数量的エビデンスの論文が中心ですが、別な形態も考えられます」

- I 「数量的なエビデンスが無くても、ジャーナルのレポートになるのですか？」
- M 「数量的エビデンスは大切です。発表の場／論文も数多くあります。しかしそれでは解決しない課題も多い！ 例えば多くのエビデンスが『虫歯予防でのフッ素の有効性』を示しています。しかしフッ素洗口を必ずしも直ぐに実施できない・エビデンスがなかなか浸透しない現状があります。現状から対話を育てるレポートがあれば問題解決に向けて一歩先に進めます」
- I 「福島放射線の問題もそうですね。疫学者は『その量の放射線なら安全だ、エビデンスがある』と言います。でも福島の母親たちは納得していません。エビデンスがなぜ信じられないか、現地の人々は何を考えているのか、対話から知り考えることが重要です」
- I 「エビデンスを追求すると、現場での課題が見えなくなることもあるんですね」
- M 「正しいエビデンスを求め、それを信じ従うことを繰り返していると、私たちの問題意識は鈍ります。『それは本当に正しいの？』と疑問を持つことは、科学的進歩の源泉です」
- I 「疑うこと、現実の課題に着目して混沌の中で“よりよい方向”を考えること、対話し考える過程を『記録・報告・共有する場としてのレポート』があることが大切なんですね」

3. どんなレポート・報告が役立つのか？

- M 「二つのレポートがあるとします。一つ目は『無作為比較法により、状況 X と状況 Y を比較した結果、二つの状況で健康には優位差が検出されなかった』というエビデンスレベルの高い、統計的な論文 1 です。二つ目は『A 市に住む B さんは、状況 X と状況 Y のどちらを選ぶかの課題につき、△□の事柄を目にし、□○と感じ、○○と悩み、○▽と対話し、□△と考えた』という事例的なレポート 2 です。どちらが有用でしょうか？」
- I 「私が大学で任期付きの教員をしているなら、論文 1 を書けば、任期の更新が出来ます。でもレポート 2 は、単なる実践記録としか見なされず、大学での仕事は続けられません」
- I 「私が F 市の首長なら、住民の健康増進計画を立てるとき、論文 1 を参考にするでしょう。トップダウンの意思決定に際して、論文 1 は根拠になります。でも私が F 市のソーシャルワーカーなら、レポート 2の方が大切です。レポート 2があれば、個々の市民の立場に立って、相談に乗れます」
- M 「ではこれから 100 年後、どちらのレポートが価値を持つでしょうか」
- I 「100 年後は、現在とはまったく状況が異なっているでしょう。100 年経ったら、100 年前の状況 X と状況 Y の差には、歴史的な意味しか感じられません。『二つの状況での統計的な差』といわれても、論文の数値から具体的な意味を読み取ることは困難です。しかし 100 年後も、そこには住民がいるはずで、何かで悩み、何かの解決を求めているでしょう。100 年後の私なら、100 年前にどのような課題や葛藤があったのか、その解明や解決に向けて、100 年前の人はどう対話したのか、レポートを読みたいと思います」

4. 対話はレポートになるか、レポートする価値があるか

- I 「『対話がレポートになる、価値がある』というのは興味深い話ですが、本当に可能ですか」
- M 「I さんが具体的な目的を持ち、何らかの課題に取り組む、取材し、そこで対話が生まれるなら、対話はレポートになります。I さんは生活上の課題や対話を経験していますか？」

- I 「私は家では子育て中です。また NPO の仕事もあります。子育て中は子供や家族と無我夢中で対話します。仕事では、会議で発言を引き出したり、人々が交流の中で自他の価値観に気づけるよう、Wify から対話を始めることもあります」
- M 「雑談からはレポートは生まれません。でも子育てのような明確な目的を持って対話しているなら、そこに発見があるでしょう。また仕事で『人々の価値観を知る・共有する』を目的に対話を育て、そこに“気づき”があるなら、レポートになると思います」
- I 「あの東日本大震災からもう数年経過してしまいましたが、先日、初めて福島を訪れる機会があり、除染作業を目にし、福島の友人と対話しました。話す中で『福岡の日常とは、まったく異なる福島の日常があるんだ！』と気づき、一瞬言葉を失いました。このときの数分間の対話、メモがあります。写真も撮りました。これはレポートになるでしょうか」
- M 「I さんが見、聴き、感じた内容は、大切です。ぜひレポートを書いてください」
- I 「私が勤務する NPO のミッションは予防歯科とヘルスプロモーションです。先日は N 市の小中学校で導入計画中のフッ素洗口につき、推進方法を話し合う会議に出ましたが、いろいろな立場の意見があり、話し合いの大切さを感じました。また K 町の福祉計画作成会議にも出ましたが、“福祉の当事者”といっても多様な当事者の立ち場があることが分かりました。実は 2 年前から、これらの会議の前身の会議に関わっているのですが、当時と 2 年後の現在とでは、明らかに社会状況が異なり、議論の焦点が変化して来ています。会議でのやり取りはメモにとってあります。これはレポートになるのでしょうか」
- M 「会議記録自体はレポート化が難しいでしょう。しかし多様な立場の当事者が、どのようにに関わり、どのように課題解決に向かうかは、アクションリサーチそのものです。実際の当事者の方との対話のメモがあれば、レポートを書くのは意義深いことだと感じます」
- I 「確かに私は NPO スタッフとしても、母親としても、これまで多様な場に関わって来ました。でもそこで何かの調査をするわけではなく、数字のデータなんてありません。しかしそれぞれの場で、私自身の問題意識を磨き、その場での人々との対話と課題解決を大切にしているなら、そこからレポートを生み出すことができるんですね」
- I 「レポートは、それほど苦しまなくても書けるような気がして来ました。でもレポートって、簡単に書けるものでしょうか。場合によっては量産できるものでしょうか」
- M 「I さんが、自分の関わる場を十分に意識したら、いろいろなレポートが書けると思います。しかしそれは“簡単”や“量産”と表現できるものではありません。量産とは『エビデンスを続々と生産できる固定した研究の枠組み・装置』を上手に作り上げたときは、可能かもしれません。しかし『簡単に書けた論文』『量産されたレポート』に興味深さや面白さは、感じられません。『個々の、流動する現実の場』は一回限りの貴重なものです。日々の生活も人生も量産なんて、できないでしょう。日々、創造的に、問い続けながら生きることで、I さんは多様な場に、幸運にも遭遇できている、ということでしょうか」

5 “対話レポートの形”のイメージ化

- I 「私も対話のレポートを書きたくなってきました。しかし『自分の関わる場を意識する、対話を育てる、取材する、対話を中心に書く』といっても、どのような形なのか、もう少し明瞭にしたいと思います。取材というなら、新聞記事や投書に似たものでしょうか」
- M 「取材し、見解を述べ、課題を明らかにする点では、新聞記事や投書に近いかもしれません

ん。しかし実際の対話が、そのまま記事や投書に再現されていることは、稀です。対話を大切にし、対話に語らせる書き方が出来れば、新たなレポートの形に近くなります」

- I 「最近は多くの人々が Facebook に、その瞬間の自分の思いを反映する写真・画像をアップし、それに感じ考えた内容を言葉で付け加えることが増えて来ました。この Facebook の記事と似たものでしょうか」
- M 「新たなレポートの形は、瞬間を取材する点では、また写真や動画を活用する点でも、Facebook の記事と似ています。しかし Facebook の記事は“いいねボタン”を押してくれる内輪の人々に向けて発信される場合が多く、公共性や記録性に欠けます。外部の人がその記事を単独で読んでも、問題意識が伝わるような、また対話や取材がなされた状況を後世への記録として残せるような、丁寧な記述が求められます」
- I 「先日 WB ゼミで、スマートフォンを用いたマイクロレクチャー作成を経験しました。手の触覚を用いたワークショップの内容がマイクロレクチャーになりました。新たなレポートの形は、このマイクロレクチャーに似ているでしょうか」
- M 「映像を中心に、新たなレポートの形を目指すなら、マイクロレクチャーは一つの原型になると思います。通常、レポートは文章で書かれますが、レポートとしての動画も有り得るでしょう。マイクロレクチャーで語られる言葉を文章に書き、それにユーチューブ上の映像をリンクさせる形式なら、言葉を中心のレポートと共存できるでしょう」
- I 「瞬間を切り取るような対話から、多くの問題提起が出来る気がして来ました。先日、吉住さんが持ってきて下さった動物フィギュアに触れたときのマイクロレクチャーの映像、たった7分間でしたが、バリアフリーやユニバーサルデザインの本質が感じられました。動画と文章（対話）を組み合わせた新たな形態のレポートを作成して、多くの人々に Wify カフェの興味深さを伝えたいと思います」
- I 「長い対話の場合はどうでしょうか。昨年から行っている Wify カフェでは、紙コップを触れただけの回も 90 分以上対話が続き、文字起ししたら数千字になりました」
- M 「長い対話・記述は質的研究における Thick description（分厚い詳細な記述）として大きな意味を持っています。数千字の記録は長過ぎて、通常のジャーナルでは受け付けてくれません。しかしネットジャーナルなら、長い記述も問題なく掲載できます。①瞬間的な対話のアクションリサーチ、②長い対話のアクションリサーチ、③マイクロレクチャーなど、投稿レポートの分類を工夫すれば、同じジャーナルに共存できると思います」

6 対話に語らせるとは

- I 「『対話に語らせる』って、どのようなことでしょうか。具体例がありますか？」
- M 「一昨年作成したブックル『ホームレス者の歯科保健実践研究』から実例を示します」
- M 「Dr 松岡の場合、相談者が 20 歳男性の事例
- 『問診表から年齢を知って驚いた。若い！！　なんでこんな若くて元気な子が？』
- 『どっか痛いところか気になるところある？』
- 『一日 3 回磨いているし問題なかろう？』
- 『それはすごいね！！見せてくれる？・・・ここ八重歯になっているよね。歯ブラシの当て方教えるからね。立てて歯ぐきに当てるのが奇麗に磨くコツ！！』・・・
- 『でも他の所は磨けてるやろ！！』・・・

『仕事はなんなん?』

『ラーメン屋』

『味見する事もあるやろ?』

『そりゃある』・・・

『それやったら歯は商売道具やん。商売道具なんやから大切にせんとね』

『ほんとやな!!』

- I 「2010 年 4 月の光景が甦りました。WB 的な歯科医療、予防の本質が見える気がします。対話の間に相談者の態度が大きく変化しています。この部分、新レポートにしたいですね」
- M 「ブックルにはこんな対話が 10 場面以上あります。今は出版中止になっていますが、改めてジャーナルに載れば、人間的な歯科医療を目指す多くの人々の参考になります」
- I 「NPO-WB の会員の先生方は、診察室で患者さんとどのような対話をしているのでしょうか。対話を核にレポートを書いていただけると、マングローブ作戦としても意義ありますね」
- M 「以下、別な対話の例です。福島に住む N 先生への 2013 年 3 月の取材より、家の放射線量をお話し戴いた数分間につき、私の質問を省略し N 先生の発言のみを示します。

『家から歩いて 200 メートルのところに同僚が震災前に土地を買っています。彼がその放射線量を測ってもらったところ、チェルノブイリのときの、強制避難区域の汚染土壌の何ベクレルと言う数値と変わらない数値が出たらしいです』

『家に帰って夜寝るときは、川沿いの部屋の中でも、一番川から遠い方で寝ています。部屋の中でも、どこで計るかによって、全然汚染量が違うんです。なので、低い方で寝ています。寝ているあたりで 0.3 とか 0.4 とかそんなもんです』

『僕も線量計は持ってます。エステー化学の 5 千円位ので体温計の形をしています。意外と正確です。ただしこの正確さは、文部省が付けているモニタリングポストが正確なら、との話の中で。あの近所で測ると大体同じ数値が出るので』

『大学の建物や構内の線量は無茶苦茶低いです。震災前と変わらない 0.05。ただし一階は土の影響でもう少し高いです。僕のいる 8 階まで行くと 0.07 とか』

『大学に長く居た方が放射線上は安全です。福島では大体大学にしかいないです』

『夜 1 時に帰り 8 時半か 9 時には大学にいます。家にいるのは 7~8 時間くらい』

- I 「臨場感があります。放射線を意識した日常生活、N 先生の対話で始めて理解できました」

7 新たなジャーナルでのレポートの形

- I 「では新たなジャーナルでのレポートの形、具体的に知りたいです」
- M 「イメージ化しやすいように、以下に一つの形を示します」

若い男性ホームレス者の歯科健診における対話と働きかけ

1 はじめに

予防歯科の臨床では、患者との対話が大切だと言われる。しかし歯学部で予防に特化して、対話の演習が積み重ねられているわけではない。他方、福岡のNPO法人ウェルビーイングでは、長年、対話を大切に歯科診療を行っている。しかし、そこでどのような対話が行われているのかを実証的に研究することは、まだ緒についていない。そこで対話の実際を明らかにすると共に、対話を通して、どのような人間関係が構築されるかの事例研究を行った。

医科においては、対話は医師患者関係の構築として重要であり、海外では〇〇のような事例研究が行われている。しかし国内では、対話の研究は行われていない。……

2 対象と方法

2013年4月、ウェルビーイングとして歯科保健相談を行った際に、歯科医師である私と対象者（20歳代、男性）との間の対話をメモした。メモを元に、出来るだけ実際の対話に即して、対話を文章化した。

ウェルビーイングのワークショップで、参加者に感想を自由に記録してもらうワークシートを改変し、歯科保健相談の対話を書き留める新たなメモの様式を開発した。（図1）

3 結果

まず持って来てくれた問診表から年齢を知って驚いた。若い！！なんでこんな若くて元気な子がこんなところにいるんだろうか？それにしても親ごさんはどこにいるのかしら、彼を支える人はいないのだろうか？口の中のことで、なんでこんな若者がここに居るのか？という疑問と驚き、怒りの感情のほうが強くて、口の中のことなんか気にならない、というくらいのインパクトがあった。

『どっか痛いところか気になるところある？』と、気持ちは置いて、私はできるだけ親しみやすい、おばさんの対応を心がけた。

『一日3回磨いているし問題なからう？』

『それはすごいね！！見せてくれる？』

彼は、しっかり正面から私の顔を見て話をするというより、若干上目遣い、それと体は、はすかい。彼は右半身をこちらに向けている。そこから私は、彼の右の犬歯の捻転と歯肉炎が確認できる。

『そんなにしっかり磨いているならきっと綺麗なんじゃない！見せてくれる？』そう言うと、『虫歯はあるかもしれないけど』とちょっと構える感じがある。

彼は、心配するというより防御して構えるといった感じ。もしかしたらいつもしかられたり、文句を言われたりしているのかなと感じる。私は、できるだけ悪いことは言わない。受容の気持ちを伝えられるように、気を付けて検診する。彼は磨いている、磨けていると思っているが、実際にはコンタクトカリエスもあり、歯肉炎もある。これをストレートに彼に伝えれば心を閉ざして聞いてくれないと思い、私はまず歯列のことから話を始めた。

あなたも対話レポートを書きませんか

今日の歯科相談の体験を報告書にします。あなたも著者の一人として、体験した対話を書いてみませんか。

来場者（ホームレスの方々）に声をかけ、お話してください。いろいろな雰囲気の方々がいっぱいいると思います。まずどなたかに声をかけ、話し始めると、雰囲気が変化します。今日の主題は「歯の健康相談」です。問診表があれば、それにより質問してください。問診表よりも大切なのは、対話を通して来場者の方々を理解することです。来場者と自由にお話してください。

【結果としての対話の書き方】対話後に思い出すまま書きだします。

Aさんとの対話

「今日はいかがですか？」

「……」「……」

Bさんとの対話

「歯で何か困ったことがありますか？」

「……」「……」「……」

【感想／考察】対話を終えて感じ考えたことを何でもお書きください。

対話メモ

感想・考察メモ

図1. 対話レポートの様式

『ここ八重歯になっているよね。ワカル?』

『このところの歯ブラシの当て方教えるからね。歯ブラシを立てて歯ぐきに当てるのが綺麗に磨くコツ!!』

あまり歯肉から出血をさせるのも気になり、そこそこの当て方の指導をする。

当たった感触より歯ブラシを歯列に合わせて小さく動かす、歯ブラシを立てて、立て磨きをするなど、歯ブラシの動かし方と当て方を教える。彼はちょっと興味を持ったかなというところ。彼は綺麗に磨けているかどうかより、踏み絵的な物言いをする。

『でも他の所は磨けてるやろ!!』

というように、私が彼を受け入れるかどうか、そこをついてくる。

『仕事はなんなん?』と私は話を変える。

『ラーメン屋』

『味見する事もあるやろ?』

『そりゃある』

彼の予想と違う展開に、ちょっと吃驚が雰囲気に出る。

私が『それやったら歯は商売道具やん。商売道具なんやから大切にせんとね』というと、

『ほんとやな!!』

ここで彼は体をまっすぐに私と相対し、しっかり正面から眼を合わせた!! この言葉だけは心に届いたな!!」

4 考察

今回の対話メモから、自分が普段行っている対話を振り返ることが出来た。改めて記録することで、この対話は、かなり水平に行われていることに気づかされた。対話の流れからすると、.....

- I 「上記のような表現、結果が“対話のメモ”というのが新鮮です！ これまでの論文では、質的なデータを示そうにも、対話を示すことは認められず、言葉を表や図に無理やりまとめていました」
- M 「エビデンスは“現実のまとめ・結果”を『固定した動きの無いもの、絶対的な数値』として示します。一方、対話は『新鮮な現実の一片を取り出し、結晶化したもの』です。結晶は溶かせば、動き始めます。レポートに対話として示された過去の『現実』は、読まれることで読者の『現実』と接続し、新たな現実を産み出します」

8 対話には二人が必要か

- I 「対話は二人の人が必要ですね。レポートは“二人の共著”の形になるのでしょうか」
- M 「確かに二人居ないと対話は成立しません。感じ方や考え方が異なる二人が出会うからこそ、質問や応答があり、気づきや発見が生まれます。しかしレポートが常に共著とは限りません。Aさんを対象者、Bさんを取材者としての対話後、Bさんが取材者としての発話部分を省略し、Aさんの語りを中心にレポートを書けば単著（著者B）になります」
- I 「レポートに示す対話は、二人が実際に顔を突き合わせて行う必要があるんですか」
- M 「スカイプや電話など、遠隔地間で電子的に行われる取材や対話も有効です」
- I 「福岡にいる私がスカイプや電話やLineなどを介して、川崎のH先生の歯科保健活動を取

材するような対話の場合も、OKなんですね」

I 「では、私が福島に取材に行き、殆ど誰とも話す時間が無く、除染現場を目撃し、体験を書きとめた場合は、レポートになるのでしょうか。この場合、登場人物は私だけですが」

M 「普段は福岡にいる I さんが福島に行き、普段の自分の価値観や感覚を参照しながら、福島の現状への新たな観察や課題を語ったものは、レポートになる可能性があります。ここで問題となるのは『普段の自分』と『福島での自分』の対話です。記されたのが単なる感想ではレポートになりません。しかし福島入り前日に、自分の考え方を『前の状況』として記録し、その後の現地での内容を『後の状況』として、自問自答の対話があったなら、自分を対象とした単独例の対話型事例研究として、まとめることが考えられます」

9 対話に加えて結果に示す情報は？

I 「先ほどのレポートの例に戻ります。こうした臨場感のある過去の対話のメモを読むと、それが現在の私の頭の中の言葉やイメージと結びつき、新たな言葉につながる感覚が生まれますね。でもレポートの著者の世界と、読者である私の世界は、結局は異なります。相手の世界をより正確に知るために、対話に加えて示せる情報があるのでしょうか」

M 「対話の流れの中で思考を可視化できる方法なら役立つでしょう。今から 25 年前、私は長崎の地域保健の現場での対話を通して、コンセプトマッピングという考え方が役立つことを知りました。そして生まれたのが二次元イメージマップや Wify などの方法です」

I 「長崎での対話から生まれたマップや Wify は、新ジャーナルの対話にも活かせるんですね。そう言えば、新ジャーナルの企画に向けたこの原稿自体も、対話になっています。対話には新たなものを産み出し、現状を変えていく力があるのですね」

10 前書きや考察の書き方

I 「対話以外の部分、特に前書きや考察はどのように書いたらいいのでしょうか」

M 「まず前書きからは『結果としての対話』に至る状況や筆者の問題意識を読み取りたいですね」

I 「活き活きとした対話を読むと、読者である私の発想も刺激されます。対話を読み、私自身も対話に参加するような感じで、課題を考えていくためには、その対話がなされた状況を、私も思い描けるような説明があるといいですね。そういえば、演劇を鑑賞するときも、事前に登場人物の様子を知ることが大切です」

I 「では『考察』はどう書いたらよいのでしょうか」

M 「対話は、2 人の話者がキャッチボールのような形で言葉を投げ合い、その中で新たな認識・発見・気づきが生まれます。対話の前後で、状況認識が変化・進歩します。その変化・進歩を記述し、考察することが大切です」

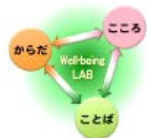
I 「結果の項では『対話に語らせている』はずですが、それを補う考察が必要なんですね」

M 「新たなレポートでは、対話自体が結果・データとして、重要です。対話というデータは、数値のエビデンスのような『閉じた結果』ではなく、『開かれた結果』『そこから更に課題を考えて行くための、途中経過としての結果』です。しかし結果を開かれたままにすると、いわゆる『起承転結』の『転』で止まることになり、落ち着きません。新聞記事ならこの形もあり得ますが、レポートとするのであれば何らかの『結』を示すべきです」

- I 「では考察では『対話の結論として、著者／私は～と考える』と書けばいいんですか」
- M 「最終的にはそうです。しかし新レポートの命は『対話』であることを忘れないでください。実際に生じた『対話』という現実の記録・データがあるからこそ、レポートとして成立します。実証的・科学的に記録を書くことの大切さは、対話に基づくレポートも、エビデンスに基づく論文の場合と、変わりません」
- I 「考察の部分に、著者がただ自分の考えを結論として述べるのではなく、データである『対話』に基づいて述べるんですね」
- M 「対話の前後で、二人の話者の状況認識や課題の捉え方に変化が生じているはずです。この変化が印象深いからこそ、対話が記録されるのです。結果の項の対話を引用しながら、何が変わったかを示し、考察することが大切です」

11 新ジャーナルの具体的な形

- I 「新ジャーナルの名称・編集体制・査読者・投稿規定などはどうなるでしょうか」
- M 「名称として『対話とウェルビーイング Forum』はどうでしょうか。Forum は『公共の討論』『資料提供』などの意味を持つ言葉です。対話から問題提起を行う新ジャーナルの雰囲気合った言葉です。誰でもが投稿も査読も出来るジャーナルが、面白いと思います。英文での執筆、動画のリンクも推奨できるでしょう」
- I 「私自身が子育てや NPO での対話を、新ジャーナルに書いてもいいんですね。私自身がレポートを書かないときは、私自身が査読したり、編集したりしてもいいんですね」
- M 「I さんのような方がレポート執筆や査読をするなら世界はもっと面白くなると思います」
- I 「学識経験者・専門家とかでなくていいんですか」
- M 「『エビデンスに基づく医学』のジャーナルなら専門家がが必要です。しかし日々の生活や WB の課題は、それとは異なります。『エビデンスに基づく子育て・交流』などと考えると、エビデンスに拘ることの誤りが見えて来ます。専門家が尤もらしく解説するエビデンスに接し『正しい（出産・子育て・進学・就活・婚活・交流・受療・退職 etc.）』を教えてください、皆がその正解に一斉に従うような社会でいいのでしょうか」
- I 「そこまで考えると、エビデンスから自由になる必要を感じます。私だって物事を自立して考えられる教育を受けて来ています。でも専門家は本当に不要なのですか」
- M 「専門家は必要です。しかし『子育て』『福島に住む』等の課題に関して“本当”の専門家は『エビデンスの正しさを語る学者』ではなく、必死で『子育てする母親』『福島で生きる住民』です。そうした現場の生活の専門家、すなわち一般の人々が、対話を通して気づいた小さな発見を、発表し、共有し、蓄積するのが、このジャーナルの使命です」
- I 「査読の雰囲気も変わってくるでしょうね」
- M 「『覆面査読者による、欠点を指摘する査読』ではなく、顔の見える形で『この対話はリアリティに欠けるけど、より鋭い対話は出来ませんか』等助言的査読が考えられます」
- I 「新ジャーナル、概要が分かりました。では私も今から出来ることを始めますね」
- M 「私は投稿規定の最初の部分を書いてみます。レポートの主な種類は『短い対話のレポート』『長い対話のレポート』それから『ワークショップなどの対話のレポート』『対話的なマイクロレクチャーのレポート』も考えられます」



From Daily senses and Dialogues into Net Journal

Masaki MORIYAMA^{*1}

Abstract: What is the meaning of writing down and record a dialogue in daily life? (Theme 1) How are we able to write essays and reports from fresh dialogues and narratives? (Theme 2) How to organize a collection of reports based on dialogues and narratives, and publish a journal? (Theme 3) Based on these themes, the next challenge follows. Is it possible to consider and scrutinize these themes through dialogue? The core members of NPO-Wellbeing have been considering these themes, continuing challenges, and revealed in the present essay four years ago. Based on this essay, our present project of publishing a new net journal is ongoing.

[Senses and Narratives 1(1) 3-12, 2018]

Key words: dialogue, narrative, daily senses, homeless people, health consultation, publishing narrative journal

^{*1} Japanese Red Cross Kyushu International College of Nursing, Munakata, Japan

masakimoriyama[[@](mailto:masakimoriyama@gmail.com)]gmail.com